1992年4月17日第三種郵便認可(毎月3回7の日発行)　2013年6月16日発行　ＳＳＫＲ　増刊通巻6915号

SSKR I.L.EXPRESS

全国自立生活センター協議会（ＪＩＬ）
Japan Council on Independent Living Centers
〒192-0046 東京都八王子市明神町4-11-11-1F
TEL 042-660-7747 FAX 042-660-7746
E-mail:office@j-il.jp URL http://www.j-il.jp/

jil 東北関東大震災 障害者救援本部特集号

No.8

自立情報発信基地

～復旧でなく、復興へ、そして新生へ～

被災地障がい者支援センターみやこ から NPO法人結人（ゆいっと）へ

被災地障がい者支援センター　黒柳　奈緒美

皆様に応援していただき被災地の障がい者支援を継続して行うことができております。心より感謝申しあげます。

（地元のスタッフの皆さん）

日々の活動の中で継続した支援ゆえに、どうしても任意団体の限界や障がい福祉サービスの不足・遅れにぶつかってしまい、思うような支援が出来ない事が多く出てくるようになりました。一番の悩みどころは、何かしたい、地域に出たいと動き出したい障がい当事者の行き場の無さでした。もともと、福祉が少なかった地域が震災をきっかけにヘルパー不足に拍車がかかりました。その結果、高齢者にも障がい者にも必要と思われるサービスが受けられなくなりました。

それと平行して、今まで福祉サービスに繋がっていなかった方々が 震災後に状態が悪化したり新たな障がいを持ってしまったりするなど苦しんでいるのに、繋げる場所がみつけられない悪循環を目の当たりにしてきました。そこで、今年4月に「NPO法人　結人」を立ち上げました。行政の動きを待っていたのでは行き場のない方々が増える一方だと考えたからです。

被災地障がい者支援センターとしての支援も昨年と同様に行いますが、今年の夏から「結人」も事業所として動き出します。少ないスタッフでの対応になるため沢山の方を受け入れることは難しいと思いますが、今、目の前にいる、今、困っている方の支援をさせていただこうと思います。

（ Eテレ「バリバラ」　事務所での収録の様子）

現在は県外からのスタッフから地元のスタッフだけになり被災地の障がい当事者に必要なことや不足していることを切実に感じております。やりたいことが沢山ありますが、経験や情報が不足しています。これからも皆様のお力をお貸しいただければと思っております。

また、今年も7月下旬から「みちのくTRY2nd」として岩手の被災地の約150キロを当事者が中心となり歩くイベントを企画しています。復興と同時に東北の街が障がい者も住みやすい街になって欲しいとの思いを訴えていきます。こちらも併せまして応援、宜しくお願いいたします。

東北関東大震災障害者救援本部発足から２年
― 2012.4～2013.5　救援活動の報告 ―

東北関東大震災障害者救援本部は大震災直後に発足し、障害当事者が障害者の視点から救援活動をめざして取り組んできました。1年目の活動は、刻々とかわるニーズに対応すべく手探りの状態での活動でした。2年目は**継続した地域生活支援**を構築すべく、被災地でのニーズの掘り起こし・相談活動・移送サービス・エンパワーメントのための交流企画・政策提言などに取り組み、地域の社会資源となるべく事業化の方向性を探りました。

― ２０１２年 ―

■４月 第７回救援本部世話人会議
救援本部世話人と被災地センターの方達との初の合同会議。
救援活動の１年を振り返り、今後３年間継続と救援体制を確認

■４月 移送サービスを３団体に委託
交通事情の悪い仮設住宅から通院・通勤・通所や買い物などの当事者の足に　　走行距離は1ヶ月で3000キロにも
ハックの家　（岩手県　田野畑村 ）
千里会めぐみの家 （宮城県気仙沼市 ）
ささえ愛山元　（宮城県　山元町）

■４月 被災地障がい者支援センター大船渡が法人格を取得
NPO 法人　センター１２３（ワンツースリー）に
被災地障害者支援センターが現地での事業化へ
地域に密着した社会資源をめざす

■５月　製作途中の記録映画「逃げ遅れる人々」お披露目
最終仕上げに入った映画を JIL 総会で試写
ご意見を集約し、再編集にかかる

■６月 被災地センターの会計監査実施
各被災地センターの会計監査を会計担当者が現地に出向き実施
寄せられた支援金は、大切に使いたい

■６月 第８回救援本部事務局会
これまで緊急的な対応であったので、2年目に入り、支援金の使い方についてルール化にとりかかる。

■６月 ２０１１年度会計報告　会計監査承認
三澤　了会計監査承認　機関紙 NO4 にて報告
支援金を寄せてくださる皆さんに感謝

■６月 機関紙 NO４　発行

■７月～　被災地センターでのさまざまな取り組みが始まる
仮設住宅へのポスティング（ニーズ調査）
夏休み等の日中預かり・日中活動・介助支援
町のバリアフリー化・交通・移送問題（要請行動・シンポジウム）
公開講座　研修会
相談支援活動・サロン・交流会などのイベント
福島県では
福祉・介護職員マッチング事業（ヘルパーが足りない）
原発事故による賠償問題学習会（障害者にも分かりやすく）
移住支援・移住体験ツアー・保養ツアー（放射能の被害を最小限に）

■８月　みちのくトライにのべ６００人参加
宮古から陸前高田までの沿岸部の150kmを30～40人位の障害者達が歩いてアピール行動
全国から参加した障害者に被災地の当事者たちは元気をもらう

相談支援　電話を受けるスタッフ
（福島・郡山）

今日はどちらへ・送迎サービス
（宮城・山元町）

みんなで造形活動（宮城・南三陸）

感動がいっぱいのトライ
奇跡の一本松前（岩手・陸前高田）

■8月　福島から東京へ保養ツアー
福島の障害児（主に就学前）を東京に招待し、スカイツリー・浅草の観光や遊園地・プールなどを楽しんでもらう。
原発事故で戸外で遊べない・近所の友達が避難していない等の現実からひととき離れ笑顔がはじけた。

■9月 被災地センターを訪問し、意見交流

■9月 第9回救援本部事務局会
緊急の救援活動が収束したので、
今後の被災者障がい者支援センターの方向性についての検討

■9月　DVD会議
記録映画の広報活動・上映会・DVDの販売などみんなの人脈
総動員で活用方法を検討する

■9月 救援本部呼びかけ人会議
救援本部呼びかけ人の
三澤了（DPI）　牧ローニ（ゆめ風基金）　中西正司（JIL）を中心に
被災地センターの今後の方向性と財政面からの支援体制に
ついての意見交流。事業支援に切り替えていくことを確認

■機関紙　NO5　発行

■10月　福島移住希望者の自立体験　2泊3日
既に移住されている先輩宅訪問
救援本部からも介助者として支援

■12月 機関紙発行　NO6

■「逃げ遅れる人々ー東日本大震災と障害者」先行上映会

ー2013年ー

■2月3日
ドキュメンタリー映画
「逃げ遅れる人々ー東日本大震災と障害者」完成記念上映会
足かけ2年にも及ぶ記録映画つくりがようやく完成
244名の参加。監督さん講演

■2月 DVD　販売開始
多くの新聞・テレビ・雑誌で上映会やDVDが紹介される

■2月 被災地障がい者支援センター南三陸が法人格を取得
NPO法人　奏海の杜（かなみのもり）に
南三陸町に必要な福祉環境を充実していきたい

■3月～ 自主上映会　各地で実施される
被災当事者の証言の影響はおおきく、「多くの方にぜひみてほしい」
という声が寄せられている
まだの方は、ぜひ！　見られた方は、何度でも！
証言の重さが伝わります。

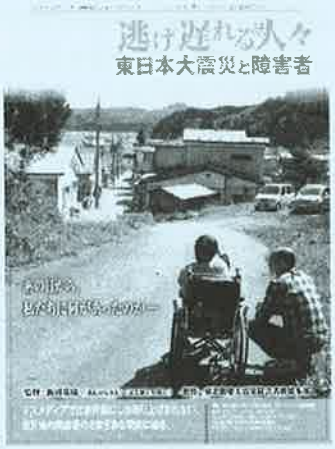
■3月 機関紙　NO7発行

■3月 第10回　救援本部事務局会
被災地センターの状況交流と13年度予算編成

■4月 被災地障がい者支援センターみやこが法人格を取得
NPO法人 結人（ゆいっと）に
宮古市で福祉サービス事業を目指し動き出す

■5月 第8回　救援本部世話人会
前回に続き、世話人と被災地センターの方達との合同会議
被災地センターの方々の事業化への意気込みが伝わる
福島からは厳しい現実が報告された

移住生活を送る（神奈川・相模原）



新聞・テレビ・雑誌で紹介される

地域に根ざした救援活動を
（宮城・石巻）

市民参加の実行委員会で自主上映会
（東京・八王子）

日本NPOセンターの方々も参加して
第8回　救援本世話人会（東京）

被災地からの報告

その11　過酷な被難生活を生き抜いた全盲のスーパーおばあちゃん

東京電力福島第一原発事故の直後、緑内障で全盲の小山田トヨさん（80）は福島県南相馬市小高区の自宅に５日間取り残されました。原発から20km 圏内の自宅でひとり暮らしでした。

救助された後も１年半にわたり、９回もの避難と壮絶な「被難」生活を余儀なくされました。トヨさんの話からは、自力での避難が困難な災害時要援護者の課題とともに、障害者（高齢者）福祉をめぐる根本的な問題が見えてきます。

今回は、AJU の「福祉情報誌」からの抜粋です。全文を読みたい方は後ろの情報をご覧下さい

（２月 13 日南相馬市・馬越応急仮設住宅にてインタビュー）

小山田トヨさん…1932 年生。川崎市出身。1981 年 49 歳の時に、親の実家である南相馬市小高区に移住。小高区には戦時中に疎開経験あり。53 歳で視力を失った。

死を覚悟した」5日間

「私は目が見えないからねー。見えてりゃ裸足ででも逃げるんだけど」――

3月 11 日の震災直後、自宅の前に住む知人から「津波が来るから逃げて」と声がかかった。その知人は「原町の親戚が心配だから見にいく」と言って出かけてしまった。自宅1階の茶の間のこたつで布団をかぶり、寒さと余震に震えた。翌日、原発が爆発。警察が「逃げてくれ」と呼びかけていた。警察は通りの裏までは入ってこられなかった。周囲の人たちのほとんどが車で逃げ、助けに戻ろうとした知人の車は警察官に制止されていたことを後で知った。

自宅は晴眼者の時から暮らしているので、針1本がどこに置いてあるかまで分かるが、新しいところは地図を描きようがない。自宅は小高駅のすぐ近く。津波は幸い線路の土手で止まった。しかし家の近くまで津波が来たため、水が引いた後も膝くらいの高さのヘドロが自宅周囲を取り囲んだ。

広報車が来て「逃げて下さい」との呼びかけはあったが、外に出られなかった。「助けて～、助けて～」と叫んだが届かなかった。電気も電話も水道も止まった。水がないのが困った。水は断水になる直前に、ヤカンに確保した。あとで知人から「さすがおばあちゃんだな」と言われた。この水で5日間生き延びた。

最初は即席ラーメンを食べようと灯油ストーブで作った。こんなに水を使うのはまずいと気づいた。ラーメンは1回きりにした。食パン2～3枚が残っていたのでそれをかじった。電気も水もないからご飯は炊けなかった。トイレはお風呂の残り湯で流した。地震の前に半分は洗濯に使っていたので、半分残っていた。地震でドロドロになったところを拭いたり掃いたりした。

街中がもぬけの殻となり、一人きりで取り残された。地震後は電車や車はおろか、猫1匹通らなかった。

やっと通じた！

電話は通じなかったが、3月 15 日の夕方にビビビッ…と、壊れたような音で鳴った。埼玉の親戚からの電話だった。先方は毎日 100 回以上かけていたらしく、「やっと通じた！　生きていてよかった！」と言われた。ヤカンの水でしのいでいたこと、ペットボトルに 2cm くらいしか残っていないことを伝えた。親戚は南相馬市役所に電話して「水を届けてくれ」と言ってくれたが、「できない」と断られた。

電話が通じるようになったので、自分から110番をかけた。福島警察の女性が出たので事情を説明し、救助を求めた。雪しぐれの日だった。警官が着くと「男物だがこの長靴を履きな。履かないと出られないよ」と言われた。大柄な警官に抱きかかえられるように泥と瓦礫の中を脱出した。

トヨさん、時の人だよ

警察の車で、市民文化会館ゆめはっとに向かった。ホールにはいっぱいの人がいた。音の感じからすると何百人といた。みんな寝られなくて立て膝で

過ごしていた。同行した警官が一度外に出て電話しているなと思ったら、「あんたは別のところに連れて行くから」と耳打ちされた。

すぐに社会福祉協議会へ連れて行かれた。床暖房が効いたところで、温かい雑炊が用意されていた。社協へは、自分の 110 番通報から警察と市役所が調整して入れることになった。警官には命の恩人と感謝した。社協に避難したところで自分のことがテレビとラジオで大きく報道された。「トヨさん、時の人だよ」「7時のニュースで今やっているよ」と言われた。5日ぶりに救助された老人として伝えられ、東京の息子たちも自分の無事を知った。

しかし、社協は 20km 圏内にあったため、「別の体育館にバスで行くように」と伝えられた。社協の事務局長が「目の不自由な人を体育館にはやれない」と言ってくれ、埼玉の息子のところに送り届けてくれることになった。社協職員を1人つけて、自動車で送ってもらった。社協の看板をつけた車だったので、ガソリンスタンドで満タンにしてもらえ、通行規制のかかった緊急輸送道路を通ることができた。

招かれざる客

3 月 18 日の夜の8時に埼玉の息子の家に着いた。着いた時息子からは「乞食の一歩手前の格好」と言われた。避難前、一度よそ行きの服に着替えたものの避難先で自分だけが着飾っていてはおかしいと思い、よれよれの服に着替え直していた。長靴をはいて、1週間もの間顔も洗えない、着替えも入浴もできなかったので、ばい菌扱いされた。

息子宅では折り合いが悪く、招かれざる客だった。2ヶ月間の滞在の後、できたばかりのショートステイを40日間ほど利用した。さいたま、熊谷、川越あたりで避難先施設を探したが、どこも入れなかった。

刑務所の方がマシ

福島市にある視覚障害者の施設が見つかった。病院が経営する 50 人定員の養護盲老人ホームだった。施設には 7 月 26 日から翌年 6 月 4 日まで 10 ヶ月余の間過ごした。視覚障害者の施設とはいえ、入所歴の長い認知症の老人が多かった。

「ひどかった」「居心地よくなかった」── 何でもかんでも世話を焼かれ、意にそぐわなかった。相談員に一人まともな人がいたので、自分の意向を伝え、自分は掃除も洗濯も一切一人でやった。入浴の時、浴槽までの手引きだけを頼んだが、あとは一切自分でやった。自分で主張しないと、頭のてっぺんからつま先まで洗ってくれるところだった。1円の金も自由にならない。保険証も年金も実印も持ち物はすべて取り上げられ、管理された。「なんだここは！？」と疑問だった。

後から分かったが、「措置入所で入ったら一生過ごすところ」と聞かされた。一生いるつもりはなかった。「施設を出たい」と主張しても出してもらえなかった。一度入ったら簡単に出られないという説明だった。だから死にものぐるいで闘った。

6畳一間の相部屋（2人1部屋）で、すぐ手の届くところに便器があった。すぐ脇でお茶を飲んでいるようなところで、「刑務所でもこんなにひどいところはない」と訴えた。同室者が排便で失敗した下着を便器で洗っていた。それは何とか見逃せたが、部屋の中を拭く布巾を便器で洗っていた。これは辛抱ならなかった。育った環境が違うのだから、その人のせいではない。「合わせられない自分が悪いのだから、自分をよその部屋に変えてほしい」と訴え、自分の部屋を変えてもらった。

ここにいる人ではない

盲養護老人ホームには月 38 万円もの厚生年金がもらえる男性利用者がいた。「金があるのに、なんでこんなとこにいるんだ!?」とその人に問い詰めた。その人は「息子や娘にとられるから」「ズボン下も買えないんだ」と話した。「いいところに入れるから」と説得されて入ったらしい。「施設を出たいなら市役所に頼んだらいい」と進言した。プライドのある人だったので、「こういうときは頭を下げて頼むんだよ」と教えた。「そんなに金があるなら、6畳1間でも借りて、1日いくらで人を頼んで世話してもらったらよいのに」と勧めた。その人は年金の5～6割は利用料にもっていかれるが、残りは貯金していて何千万円とあるらしい。その資産は施設の経営者が管理している。

年金を 20 万円くらいもらっている人が大勢いた。12 万円の利用料払って、残りの8万円は施設が預かって、全体で何千万円という金額になっている。そういう人は自分では出られない。手を引っ張ってくれる人がいないと一生出られない。そうしないと牢獄だ。職員の中には冷静な人もいて、「小山田さんはここにいる人ではないと思っていた」と、そっと耳打ちしてくれた。親身になってくれる職員は、周りに合わせるしかなく小さくなっていた。

いわき市出身の緑内障の同室者に身内が会いに来た時に、面会者にこっそり相談した。いわき方面で出る先を探してくれるように、しかも秘密裏に進めてほしいことを頼んだ。電話をかける時は職員にそばで立ち聞きされるので、うかつなことは喋れない。

まるで姥捨て山(うばすてやま)のように、見捨てられた人が入所していた。利用者は金づるなので、経営者は死ぬまで放さない。利用者に共通するのは、経済観念がないこと・金がないのに使わされること・自分のことしか考えない・みんな共通していた。「なるほどなぁ」とつくづく思った。社会勉強させてもらった。自分は一人ひとりの生き方をみて、こういうところを見習いたい、こういう風にはなりたくないなと研究した。

施設では 10kg もやせた。顔を合わせるとみな食べ物の話をした。粗末な食事で、腹が減ってしようがなかった。男性利用者が、「今日は鳥のエサだ」「今日は犬のエサだ」「猫のエサだ」と食事の度に話していた。夜9時に就寝だったが、腹が減って寝られなかった。せんべいを買っておいて、水を飲んでしのいだ。正月なのに餅も食べられなかった。

2012 年 6 月 4 日、ようやく出られることになった。出たいといってもなかなか出してもらえず大騒ぎになった。「外泊体験ならよい」と言われたので、「体験してきます」と 6 月 4 日に出て、そのまま退所した。でも施設の都合で6月24日まで籍を抜いてもらえなかった。

創立以来 20 年間で「生きたまま退所した最初のケース」と言われた。死んだら出してくれる。死ぬまで出してくれないところだった。

話がちがう

入居先は県が借り上げて原発から避難した住民を受け入れる、民間借り上げのみなし仮設住宅だった。90 歳のばあさんが大家で、病院からアパートを買い上げて経営していた。やり手のおばあさんで、今も現役で仕事をし、食事を作って利用者に食べさせていた。1階ではおばあさんが社長を務める会社が老人デイサービスを経営していて、日中そこを利用する決まりになっていた。入居料は無料だったが、そこを利用しないと食べさせてもらえなかった。

事前の説明では「土日は食事が出ないので自炊して下さい」とのこと。自炊が楽しみで、これで好きなものが食べられると喜んで入ったのに、実際には「ガス、水道は使わないでください」と制限された。朝8時から夕方4時まではデイサービスに強制的に行かされた。他の利用者も「入る前と話が違う」と漏らしていた。デイサービスは認知症の高齢者ばかりで、「9＋3は？」「5＋5は？」というレベル。「なんぼなんでもこれはないだろ」――。苦痛で苦痛でしかたなかった。話が違うと訴えたが、通らなかった。夕食後の話ではみんな不満を漏らしていた。それを職員に立ち聞きされた。

みなし仮設に入っている間に、福島市の養護盲老人ホームからエリートと目される相談員がわざわざいわきまで足を運び、「小山田さん、戻ってくれ」と懇願された。片道2時間かかるところ、1ヶ月のうちに2～3回も訪ねてきた。「無理やり連れて帰るなら、車から飛び降ります！」と断った。

デイサービスの職員とは、「面接の時の話と違う」と何度も交渉した。「税金で生活しているのだから文句言うな」と言われた。一部は自己負担を支払っているし、残りは介護保険制度から出ているはずだと言い返した。売り言葉に買い言葉から、とうとう「お金は要らないから帰れ！」と担当職員に言われた。「よーし！売られたけんかは買ってやる！」と、次の朝知人に頼んで出ていくことになった。

出ていく時お金だけは払うことにし、「かかった分を計算してください」と頼んだ。「担当職員が不在だから待って」と言われたが、最後まで現れなかった。迎えが来て、お金を払えないまま去った。裏の方で声はしていたので職員はいたと思うが、仮にも客に向かって「出ていけ」と言ってしまい、合わせる顔がなかったのだと思う。

この薄い血は何ですか ！？

小高区の自宅に一度戻った。2～3日片付けをしたが、水道が壊れたままで住めなかったので、知人に頼んで秋保温泉(あきう)に連れて行ってもらった。とにかく安い宿を探して1泊 6000 円というところを選んだ。疲れが一度に出て3日間寝込んでしまった。宿の人が毎食運んでくれたが、一切食事に手をつけられなかった。温泉にも 10 日ほど浸かることができず、宿の人に心配された。

血圧の薬をもらいに医者にかかったら笑われた。「ハハハ… この飽食の時代に、この薄い血は何ですか!?」と高笑いされた。養護盲老人ホームでも、さらにデイサービスでもやせてしまった(現在の仮設

に入ってから体重は元に戻った)。歯医者にかかり入れ歯を直してもらったが、お盆休みにも掛かり40数日も滞在することになった。

目の見えぬ者は置けない

老人休養ホームなかやま山荘(宮城県社協経営、2013年2月で閉館)に行った。十数年来利用してきて、何十人も仲間を連れて行ったなじみの施設だったが、経営者が替わって方針が変わっていた。「目の見えない人を一人置くことはできない」「付添がないとダメ」と言われ、2泊して出てきた。

次に秋田県新庄市にほど近い鳴子(なるご)温泉に行った。1軒目は姥の湯。ここは段差が激しく迷路みたいになっていて、使いにくいので4～5日で出てきた。2軒目に農民の家を訪ねた。目の見えない者は置かないと言われ、1泊だけして出た。

息子に電話したら、「老人1人で泊まり歩いて何ごとだ！」と怒られた。こっちは好き好んで温泉旅行をしているのではない。少しでもお金のかからない過ごし方を考えて、6000 円の宿を選んで訪ねただけなのに。

この間の避難を手伝ってくれた知人にはお金を支払った。「受け取らない」と言われたが、それなりの金額を惜しげもなく支払った。「お金はこういうときに払わなくてどうする」と思った。

橋の下に住むわけにも…

仕方なく、住んではいけない小高区の自宅に戻ることにした。電気は戻っていたが、水道がダメだった。飲料水は知人が届けてくれた。食料品は買ってきた。でも知人から「月曜日からは水をもって来られない」と言われた。家の中は地震の時のまま、ガラスや物が散乱していた。人形のケースが壊れて、板の間にガラスが飛び散ったまま、足の踏み場もなかった。住めるように片付けた。一番大変だったのは冷蔵庫だった。1年半も放置してあったので、食べ物が腐って「臭いの、臭くないのって大変！」な状態だった。一人でかき出して、庭に埋めて始末した。冷蔵庫は拭いても匂いは取れなかった。小高区には家に戻れず、まだ手つかずという家が多い。

自分が自宅に戻ったことは、以前担当していたケアマネに伝わった。「小山田さんが制限区域の自宅に住んでいる！」と、市役所の職員2人が慌てて飛んできた。「命助かった！」と思った。

市役所では「80 歳のばっばが1人で住んでいる」と大事件になったと言われた。「橋の下に住むわけにいかないし」と言い返した。市職員が訪ねてきたのは金曜日だった。「急いで探します」と約束したが、土日月の3連休を挟むことになり、「待ってください」と言われた。連休明けの火曜日に迎えが来て、現在の仮設住宅に入ることができた。

(インタビューは続きますが、紙面の関係上ここで終りです。また途中省略した部分もあります。AJU さんには承諾をいただいております。)

「AJU福祉情報誌123号より抜粋」 全文はこちらで
http://www.aju-cil.com/book/magazine.php

【みちのくTRY 2nd】 一緒に歩く・ボランティア・協力者募集

今年も挑戦します。7月28日（月）陸前高田から～8月9日（金）宮古田老まで

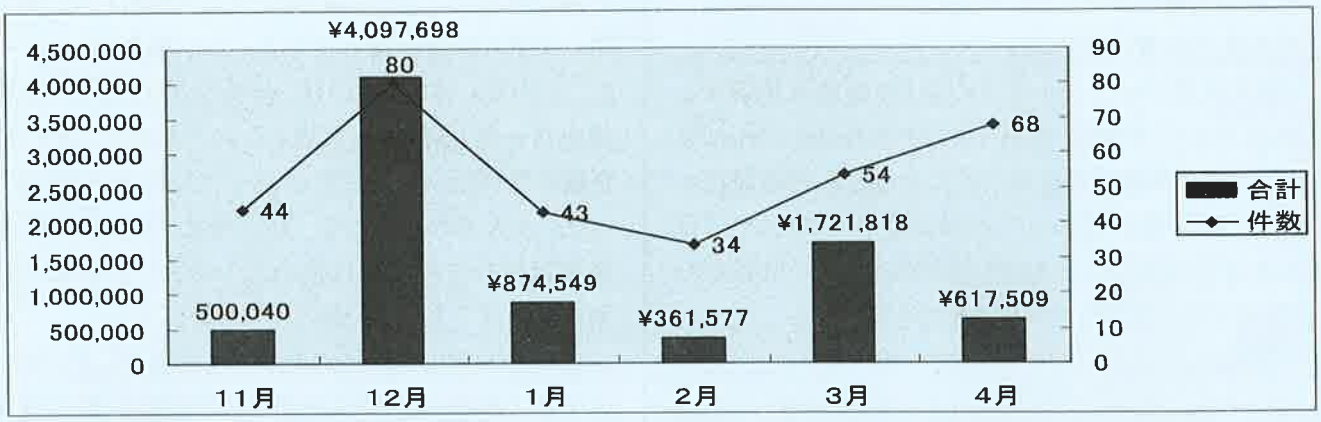
陸前高田市の奇跡の一本松から宮古市田老のスーパー堤防まで歩きます。途中、沿岸部の市町村役所に要望書を出したり、地元の人と交流会をしたり、町の人へのアピール活動など様々な活動をしながら歩きます。二度目となる今回のみちのくTRYでは、歩く障がい者は岩手県及び被災県、東北地域からの募集となります。ボランティアの方は全国からどなたでもです。「震災から復興する街が障がい者の住みやすい街となってほしい」また「あらためて被災沿岸部を歩くことで全国からの息の長い支援を呼びかけたい」　それぞれの色々な想いを、沿岸部を歩くことで全国に発信しようというイベントです。

詳しくは下記までお問合せ下さい　　【連絡先】みちのくＴＲＹ実行委員会
宮古市末広町６－８　被災地障がい者センターみやこ気付　　担当　黒柳
Tel：0193-77-3636　Fax:0193-77-3643　E-mail：try_mitinoku@yahoo.co.jp

○●○　皆様からいただいた支援金　○●○

― ２０１２年１１月から２０１３年４月まで ―

２０１２年度の決算報告は、次号で掲載します。ご支援ありがとうございます。



ドキュメンタリー映画　「逃げ遅れる人々―東日本大震災と障害者―」

各地で上映会が行なわれています。

宮城県　徳島県　広島県	１回
神奈川県　愛知県　栃木県　新潟県　三重県　静岡県	２回
兵庫県　大阪府	３回
東京都	１０回

数字は救援本部にご連絡をいただいた団体のみですので、実際にはもう少し多くの上映会が行われております。上映会には準備に相当の時間を要します。お忙しい時間を使われての開催ですので大変ありがたく思います。

DVD 販売しています

ご支援いただいている皆様のおかげで DVD 販売が順調です。東北関東大震災障害者救援本部東京事務局の販売のみで 799 本になりました。現在までの売り上げで制作費が支払いできそうです。今後の売り上げにつきましては収益のすべてを救援活動の支援金とさせていただきます。

また、多くの新聞・テレビ・雑誌などでも紹介をされております。まだご覧になっていない方はＤＶＤをお求め頂くかお近くの上映会にお出かけください。

主催者から届いた声（抜粋）― 練馬 ―

この上映会をやってよかったと思っています。そして対応を障害者と健常者を問わず、行政と区民とを問わず一緒に考える機会になればと心から願っています。たくさんの方々に見ていただくことができました。心から感謝を申し上げます。

アンケートに寄せられた声（ほんの一部）

- いろんな福祉映画があるけど本当のことを語っている
- 地域とのつながりが大切なことに気付いた
- 問題が大きすぎて受け止めきれない　忘れずにこだわり続けたい
- 証言者達のその後が知りたい　続編を

東日本大震災が過去のこととして風化されないように、情報を発信し続けることだと思います。救援本部では皆さまのご厚意に支えられ、被災地の障害者団体と連携しながら、現地での様々な支援に取り組んでいます。救援活動が本来の社会資源に移行できることを目指し、地域の方々とつながれるよう継続していきます。

○●○　引き続き　皆様さまのご支援をどうぞよろしくお願い致します　○●○

東北関東大震災障害者救援本部

＜東京事務局＞ 全国自立生活センター協議会（JIL）内

〒192-0046　東京都八王子市明神町 4-11-11 シルクヒルズ大塚１F

TEL：042-631-6620　FAX：042-660-7746　E-mail：9enhonbu@gmail.com

ホームページ　http://shinsai-syougaisya.blogspot.com/

≪救援活動の状況については、上記のウェブサイトにて、随時ご報告させていただいております≫

このお便りはご支援をいただいた皆様に活動報告としてお届けしております。

払い込み用紙は、強制するものではありません。支援金をご協力いただける方はご利用ください。

発行所　東京都世田谷区砧 6-26-21　障害者団体定期刊行物協会　　定価　　１００円